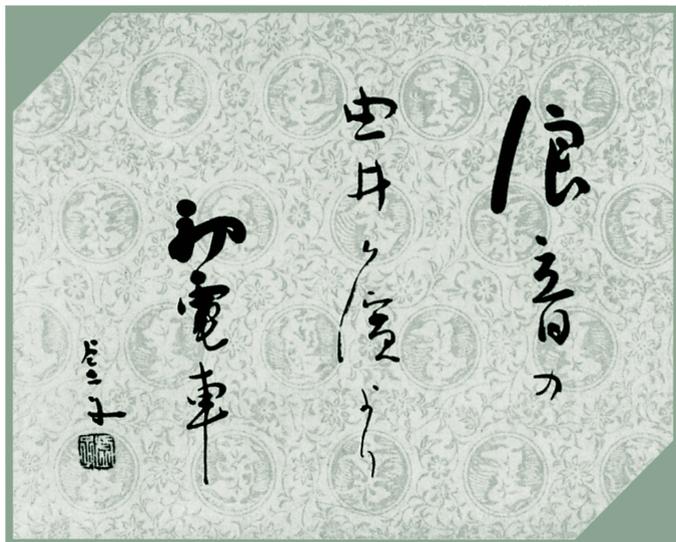


詠 詠 集

一 月 号



花鳥諷詠®

令和3年1月■第394号 ————— 目次



新年の御挨拶	稲畑 汀子	2
花鳥諷詠選集	木村 享史	4
	荒船 青嶺	6
虚子研究 『六百五十句』研究 (13)		9
虚子研究 虚子宛書簡を読む (十八)		
明治二十四年六月七日碧梧桐書簡(封書) 後編	椋 誠一朗	14
子規と漱石と私 16 娯楽		18
一頁の鑑賞	和田 和子	20
	原田 佳織	21
この人の作品	前北かおる	22
風報		23
新刊紹介		25
書評	今井 肖子	26
<hr/>		
地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

凍星を仰ぎ喪章をはづしけり

大牟田 鹿生子 憲二

浮島へ渡りおほせし穴まどひ

東京 坂口 祐子

パン焼けるまでの頬杖小鳥くる

名古屋 幅 みや女

前置きの長き松茸貫ひけり

鳥取 西尾 青雨

快復の先づ草の実にとびつかれ

珠洲 岡村 俊子

二句短評

一句目——何方の葬儀であったのか、いずれにしても身近に共に暮した人が身罷られお送りしたのであるう。

大事を終えて仰ぐ夜空に凍星、泣く間もなく過ぎた時間を癒やしてくれるでもなく、放心の作者が佇む。

二句目——蛇は水中を潜る時はまっすぐに速いが、水面を泳いで行く時はくねくねと決して速くはない。

ましてや穴惑、よろよろと浮島まで安眠の地を求めて渡ろうとする。辿り着いた蛇に作者の愛情が深い。

入選六十句

住職が芒活けをり月見堂 長野 鈴木しどみ

秋裕 卒寿の紅を憚らず 坂井 奥 清女

百選の水を豊かに新豆腐 神戸 田中あかね

折り返す事を忘れてゐる花野 高知 栗坂 海馬

虚子塔を拝し大きな椿の実 草津 竹内 恵子

いつの間に敬老の日の主役へと 宗像 井上真知子

好きなこと出来る一人の夜長かな 君津 榎本 静江

そり返りみな不揃ひの唐辛子 小松 橋本 正乃

三つしか持てぬ団栗幼の手 下関 岡本 恒子

秋風に足遊ばしてゐるリフト 松山 丹 経子

何事もなく夕暮れて赤とんぼ 太宰府 柴田慧美子

露の世や卒寿となりてわかること 北九州 篠原 綾野

木犀の香を被りきて席に着く 鎌倉 緒方 初美

花言葉おしやべりとありアマリリス 四国中央 真鍋マキ子

新涼の風過ぐ森の息づかひ 金沢 村本寿美枝

露の世のリハビリ先づは検温す 倉敷 大槻 秋女

白山へ道は一筋大花野 野々市 中村 珠栄

訪ふ人も無き山里の柿熟るる 伊賀 藤井 光子

鳥たちへのこす通草の高さかな 北九州 元田 品子

離乳食慣れて来し子に梨をむく 芦屋 山村千恵子

見晴らして芒の風に吹かれをり 西予 三瀬 教世

学習の糸瓜束子となりにけり 白山 大橋美代子

秋の日を峰に預けて鋏洗ふ 京都 本谷眞治郎

猪垣に囲まれてゐる山のカフェ 松山 篠原みどり

枯蠟螂振り上げし斧欠けてをり 阿南 田中 栄子

身に入むや加齢の所為にする見立て 神戸 上岡あきら

頼もしき後継者なり稲を刈る 宇佐 内尾さち子

桃むきてくれゐる夫の太き指 南相馬 高野かつみ

団栗を拾ふ園児にある個性 名古屋 内藤 信子

病室に届く俳誌や年尾の忌 高知 河野 紅柳

蕎麦の花三反歩づつ隣り合ひ 十日町 小川 則子

薄もみぢ雲ゆつくりと流れゆく 福津 柴田佳津子

秋霖の音を閉ざして美術館 高松 福江 昌子

露深き草の中なるへんろ墓 阿南 かつせ千津

十二色鉛筆削る良夜かな 高松 もりおかともこ

コロナなど忘れてしまふ良夜かな 敦賀 為永香月枝

秋の声行間広き句集より 豊後高田 大波多美妃

良夜なる命名の筆おもむろに 西脇 岸本 悦子

木犀の匂ふや火星近づきぬ 富山 高城 玲子

爽やかや文字の食み出すお礼絵馬 福岡 阿部 弘子

杖曳きてみなに逢へたる年尾の忌 小樽 岩崎スイ子

烏瓜引いて夕日を引き離す 吹田 堂前 悦子

通り抜けできぬ立札紅葉山 小樽 遠藤 嶺子

松手入をへし法被の匂ふ帰路 伊賀 西澤与志子

大会は中止家族で庭花火 茨木 入江緋紗枝

● 荒船青嶺選

特選五句

てらてらと猪のぬた場の泥臭ふ 江津篠原 てるみ

友見舞二十三夜の帰り道 札幌置田 正子

木犀の香りの中の土いぢり 東京岩村 恵子

深更に灯して梨の選果場 石川駒形 隼男

西虚子忌西に椿子物語 芦屋奥田 好子

二句短評

一句目——野生の獣が来て泥浴びをするところ。まだ泥浴びをして間がないだろう、泥んこの上辺に搔き混ぜた泥濘が濁ったままの状態で一面が獣臭に充ちているのだ。

二句目——この見舞いは病院ではない。この機会を逃せば再会はないだろう。意識の確りしている友は、思い出を話して尽きない。

後る髪を引かれる思いで表に出たら、明け方に近い二十三日の月が低く掛かっていた。

「友」が何時までも気になる句だ。

捨てきれぬゴルフ道具や夫の秋 高山 原田 尚子
 月の波砕き最終便の着く 福山 早間 幸枝
 曇天に朱ヶの染み入る梅擬 川崎 飯川 三無
 乾杯す夫と二人の敬老日 大分 鶴原 鈴子
 寛ぎの居間にも香る金木犀 伊勢崎 柴崎登起子
 門限のある名園の月に歩す 広島 濱本伊勢代
 秋蝶や老犬の歩のその先へ 大分 峯戸松祥子
 翹たたみ日矢となりたる隼よ 大阪 上西左大信
 秋晴や吹けぬ口笛吹いてみる 神戸 高橋 純子
 遊学の頃の淋しき秋の暮 佐賀 松丸 昭子
 放棄地とならず今年の落し水 諫早 外輪ふみえ
 記念樹の立派に育ち小鳥来る 倉敷 江原由美子
 天空を揺らして祖谷の蕎麦日和 倉敷 中田 鈴江
 継ぐ人の無くて熟柿の大屋敷 さいたま 池澤はるを
 木犀のこぼれ尽くして昼しづか 千葉 駒井ゆきこ

入選六十句

藁葺の藁のぶ厚さ小鳥来る 天理 松田 吉上

麻の衣の皺も贅なるお洒落かな 札幌 押野 美江

虚子塔を拝し大きな椿の実 草津 竹内 恵子

岬いくつ曲がりし故郷 鱈雲 高知 沢田 佳代

紫菀にも偲び小諸の旧居かな 砺波 田上真知子

溪流のしぶき飛びつく葛の花 松原 加藤 あや

山影が輝かせある今日の月 四国中央 豊田 耕造

露の世や卒寿となりてわかること 北九州 篠原 綾野

幅を取る孫の大靴ちちろ鳴く 伊賀 羽根 千恵

単線の車窓明るき稲筵 岡山 長江 康子

天井の染みは瑞雲秋涼し 大村 福田 洋子

秋草に溺れさうなる城堤 岡山 児島 倫子

底紅を見なよスマホを見てないで 松江 小村 四温

草の実を手取るだけの散歩かな 倉敷 小幡 恒雄

秋灯下日々一章の虚子俳話 神戸 中井 陽子

萩原や手前の風の見えざりし 高松 岩瀬由美子

人の手を語り尽した稲架の黙 名張 松岡 芳人

クーラーの部屋に鎮座の埴輪かな 青森 小田切礼子

朝食を楽ししむ静寂小鳥来る 小平 青木美代子

栗をむく手先が年をとつてをり 鹿児島 所崎 玲子

一人来て終る法要地虫鳴く 松山 渡部美恵子

ねこじやらし野道のやうに父母へ供華 八千代 向阪 由紀

水澄んで疏水これより京に入る 大阪 山内 繭彦

月の供華一夜飾りと思へども 鹿児島 青野 優子

過去帳に夫の名記す初時雨 安来 細田 洋子

紫菀咲く果は信濃へ続く嶺嶺 高崎 藤卷 淳子

快復の先づ草の実にとびつかれ 珠洲 岡村 俊子

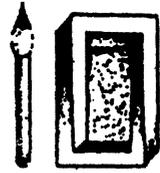
猪垣に囲まれてゐる山のカフェ 松山 篠原みどり

あす手術けふは一日虫聞いて 徳島 遠藤 和良

能登の海静かに暮れて今日の月 輪島 向 佐ち子

世に遺す原爆ドーム小鳥来る 福山 広川 良子
 ねこじやらしだけと遊んでをりし風 宇佐 加来 富子
 松籟も潮騒も絶え天の川 神戸 平岡 良一
 秋の蚊のいと小さくて素早くて 刈谷 境 雅代
 青といふ色の硬さよ新松子 東京 柏木佐智子
 草の実をつけて靴先濡れてをり 横浜 秋吉 斉
 拾ひ来し団栗夫の散歩かな 小郡 西田 淑子
 住み古りし昭和の家に小鳥来る 芦屋 門脇 重子
 生家まだ屋号で呼ばれ秋祭 市原 飯塚 咲子
 牛ねまる丘の起伏や秋日濃し 青森 七戸富美子
 馬追や顎まで浸る仕舞風呂 広島 岡山たかし
 棒稻架の解く匂ひや父慕ふ 青森 菊池 つる
 弓撓ひ秋気一氣に引き絞る 神戸 涌羅 由美
 秋拾母の遺愛の帯締めて 高松 多田てい子
 神事終へ亥の子の餅を子らに撒く 宝塚 細田 清子

鉦叩灯を落したる厨より 高松 真鍋 孝子
 末枯の始まつてゐる池の黙 四國中央 豊田みゆき
 石炭のまちはまぼろし水澄めり 札幌 増田 植歌
 捨てきれぬゴルフ道具や夫の秋 高山 原田 尚子
 蜻蛉の群音の無く集まり来 羽生 樋口レイ子
 足音のやうな気がして秋の雨 伊賀 池本 準一
 お六櫛工房狭しそぞろ寒 大阪 西川寿賀子
 晨朝を始む御坊に鳥渡る 大阪 今村久美子
 吾子の手の温もり残る木の実かな 高松 鍋田 佳
 天高しドクターヘリの低く飛ぶ 鳥根 森口 時夫
 満月や街は影絵のごと動き 宇部 爲近 正子
 匂ひたつ大地の闇に月を待つ 神戸 豊辺 靖子
 敬老日自治会からのとろろ昆布 大津 上野 滋子
 栗届く包む地方紙湿らせて 明石 駿河 亜希
 つくづくと知足の暮し小望月 鹿児島 坂本 啓子



編集後記

一行の心を籠めし年始状

虚子

昭和三十年鎌倉・土筆会での句だそ
うです。実は年末、この句の出典を尋
ねられたところ手持ちの資料では分か
らず、資料を持つている方々にお尋ね
して確認がとれました。この一年、い
ろいろな方にお世話になったことを思
い返し、全ての方へ「感謝！」の一行
を心を籠めて送らせていただきます。
今年もよろしく願います。

年末の十二月十七日、内閣府から五
年ぶり二回目の立ち入り検査が入りま
した。二人の調査官が一日掛けて書類
等をチェック。公益社団法人として間
違ひなく活動しているかの確認を受け
ました。いくつかの問題事項の指摘は
ありましたが迅速に改善することを約
束し、一日を終えましたことを皆様に
もご報告致します。

その一週間前十二月十一日にはリ
モートによる支部長会議を開催致しま
した。今後も各支部との意見交換を続
けられたらと考えています。初めての
リモートにご協力頂いた参加者もおら
れ、心よりお礼申し上げます。

本年度の会費を未だお支払いされて
いない方へコンビニでも支払可能な請
求書を送付いたします。昨年四月から
の年会費ですので、速やかにお支払い
頂ければ幸甚です。なお、便利な口座

引落の手続きも受付中ですので事務局
までご一報お願いします。(須川)

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
4月号	1月20日	稲畑汀子 大輪靖宏
5月号	2月20日	木村享史 湯川 雅
6月号	3月20日	稲畑汀子 安田豆作
7月号	4月20日	木村享史 山田佳乃

花鳥諷詠一月号(通巻第三九四号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年一月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人
日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目八九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二